

組織面でも研究面でも全国をリードする支部に！

石田智巳（京都支部・全国常任委員長）

支部結成50周年おめでとうございます。

大阪支部は、現在最も元気な支部の一つです。元気というのは、世代交代と役割分担が進んでおり、活動が原則的に行われ、支部大会などで積極的に外に向けた打ち出しをしているところにあると思っています。また、健康教育分科会のように、コロナ禍というピンチをチャンスにして打って出ているところも大阪らしいところですね。かつての大阪支部では、陸上、サッカー、水泳、競争、グループ学習、ヴィゴツキー、中村敏雄などのプロジェクトやテーマ別の学習会を組織して、研究組織面でも全国的にリードしていました。最近のニュースにそれらの動きが見えないのはコロナの影響なのではないでしょうか。やや寂しく思っています。

ところで、健康教育では、「対話の授業」を打ち出していますが、これについては未だ批判もあります。今では、学習とは、客観的な知識や技術を学ぶことから、もちろんそれらを含めて社会的構成主義（ヴィゴツキーなどの活動理論）への転換が起こっています。カリキュラムも、制度（学習指導要領）としてのカリキュラム、教師の構想にあるカリキュラムから、子どもの学びの履歴や事実としてのカリキュラムへの着目が起こっています。客体の事実というよりは、解釈の事実に焦点が当たっているのです。さらに、ヴィゴツキーは、思考の原動力として、興味や関心ではなく、対象を前にした困りごとや矛盾をあげています。また今日の学習においては、文化的多様性、多声性、対話などがキーワードになっています。たとえば、矛盾や困りごとは、体育でいえば教師の用意した教材に対する子どもの戸惑い（2:0からのハーフコート・バスケのやらされ観）、子どもの間のスポーツ観や学習観、あるいは技能の差異からくるやりにくさなどがあります。この矛盾や困りごとをどのようにして活動の発展の原動力と位置づけていくのか、ここにこれからの体育研究（系統的な指導とグループ学習の統一）の視点があるように思います。だから、体育授業における対話というのは、同じ価値観を共有することではなく、それ以前にその差異や矛盾に焦点を当てて、そこから子どもと教師がそれらを克服していくところに見いだせるように思います。そこに、3ともモデルでいう「意味の問い直し」が起こるのでしょうか。これらについてぜひ研究を深めていただきたいと思います。

ということで、これからも支部60年、70年、いや100年を目指して、組織に裏打ちされた研究を推進してさらなる発展を遂げていかれることを期待しています。また、全国の活動にもさらに手を貸していただけますとありがたいと思います。